様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　4 月　20 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520486
研究課題名（和文）　現代における漢語表記の実態とその背景に関する調査研究

研究課題名（英文）　The Japanese writing system of “kango”

研究代表者
笹原　宏之（ SASAHARA　HIROYUKI ）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：80269505

研究成果の概要（和文）：
現代日本語における漢語表記の多様性、特に揺れについて多面的に捕捉するために、従来の枠組みを拡大し、それぞれの表記上の揺れや違例を生じさせたことが想定される要素について多角的に検討した。その結果、少なくとも 10 種の次元を異にする諸条件の存在を確認し、それらが適宜作用している漢語表記の現状について解明した。調査を通じて確認された表記主体や読み手の意識も加味し、漢語の表記、特に本来的とは認めがたい表記の生み出されるメカニズムとその役割などの法則性等についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In order to understand many sides about the diversity of the Chinese word notation in present age Japanese, especially a variation, the conventional fixed framework was expanded, the element in which having produced the notational variation and the exception is assumed was examined on many sides. Existence of the terms which differ in at least ten sorts of dimensions was checked, and it solved about the phenomenona in which they are acting suitably.
The consciousness of the writer and reader who were checked through investigation was also considered, and it clarified about rules, such as a mechanism by which the notation of a Chinese word and the notation it is especially hard to accept that are original are produced, and its role.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成 22 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 23 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語
キーワード：文字・表記　漢字　メディア　ひらがな・カタカナ　表記の揺れ　交ぜ書き　新聞

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

かねてより日本語の文字、とりわけ漢字にかかわる種々の実態について通時、共時の両方の観点から探究する調査研究を実施してきた。漢字は、字種、字体、用法の各面の考察に加え、文字のもつ本質である、語をいかに表記するかという視座が重要であることも著書、研究論文などで示してきた。ことに日本語の文字の多様性は、世界でも随一の複雑な表記を生み出しているが、その実態と背景の体系的な解明は、学界においてなお十分にはなされていない。

日本語を表記するための複雑な文字体系において、語種と文字体系との一致、すなわち和語は平仮名ないし訓をもつ漢字、漢語は漢字、外来語は片仮名などといった一般的な傾向が観察されることもあったが、中でも漢語は漢字で記す、という原則は、現在では崩壊しつつあるといえる面が生じていることが各種メディアにおいて随所にうかがえる。

また、漢語は、種々の理由から、本来の漢字とは異なる漢字によって表記されるケースも多数出現している。すでに学術用語を表記する「腺」「膵」などの字に関し、調査結果を部分的に示しているが（『国字の位相と展開』ほか）、それらの揺れの原因としてはきわめて多くの要素が関連しており、さらにその要素は多様な方面にわたるものであることが予測される。

そうした漢語表記の実態に関しては、国立国語研究所よりいくつかの成果が示されているが（国立国語研究所報告 75『現代表記のゆれ』　1983　秀英出版　など）、対象とされた分野が新聞や雑誌のサンプル箇所だけに限定され、揺れの要因に関する分析も多角的になされる余地を大きく残したものであった。

このように漢語の表記については、多角的に検討されることがほとんどなかっただけではなく、広くかつ大規模な実例の収集も、また整理、類型化もなされる機会も乏しかった。換言すれば、規模が大きくかつ上記の内容をもつ調査研究が国内外でいまだに存在しない。

当研究は、そうした研究状況への着目と視座を背景に有するものであり、日本語表記に関する積年の課題に対応するものである。

２．研究の目的

当研究は、現代日本に存在する、新聞をはじめとする複数のメディアにおける漢語に関する表記の実態を把握し、その本来的な表記とは異なる表記を生じさせている諸々の要因について解明することを目的とするものである。

そうした漢語表記の揺れが、いかなる要素によって生じるものなのかということにつき、和語や外来語、混種語の表記についても視野に入れて日本語表記全体から見た漢語の表記の位置を確かめつつ、具体的な例を通じて諸原因を各方面から種々の方法によって究明する。

それとともに、日本語において漢語を表記する際に適した表記形とはいかなるものであるのか、という将来のあり方に関わる諸要素を見出す。

３．研究の方法

新聞、テレビ放送の各種番組や CM 等における字幕やフリップ、また雑誌（月刊誌、週刊誌など）、インターネット上の各種のホームページやブログ、ツイッター、電子メール、手紙などにおいて使用された漢語を中心とする語の表記の中で、非本来的な表記など、重要度が高いと考えられたものに対する調査と分析を行う。

各種の国語辞書における掲出・注記と新聞などにおける実際の用例との間に見られる差異を明確化し、その表記のなされた背景に存在する諸要素に関し、各方面からの分析と、種々の考察を行う。

そうした用例に対して、各種の表記集における規則との照合などの検討を加える。また、それらの表記形がもたらすことが期待される各種の効果やそれらの実際の作用についても明らかにするため、表記を生み出した者（規則を準用するものを含め）や受容した者への意見聴取も実施する。

４．研究成果

日本語学における、文字・表記研究の研究分野において行われてきた研究対象ではあるが、漢語表記の揺れについてより多面的に捕捉するために、従来の固定的な枠組みを拡大し、それぞれの表記上の揺れや違例を生じさせたことが想定される要素として、次の１～６を設定して、個々にその内実を明らかにした。

１　政治的制約条件：歴代の国語政策、とりわけ漢字政策による条件

2　集団的制約条件：新聞やテレビ放送など各種マスメディア業界が定めた表記規則による条件
3　物理的制約条件：筆記素材・表記機材による条件
4　生理的制約条件：表記の産出時における条件
5　心理的制約条件：表記の産出時における読者への配慮、より積極的な表現意図による条件
6　文脈的条件：その前後を含めた文字列の状況から見た読み取りやすさの意識による条件

さらにその他にどのような要素が考えられるのかを多角的に検討し、品詞性など他に少なくとも４つの条件の存在し、具体的な場面に応じて適宜作用している現実について解明した。

調査を通じて確認された表記主体や読み手の意識を加味しながら、漢語の表記、特に本来的とは認めがたい表記の生み出されるメカニズムとその役割などの法則性等について明らかにした。こうした諸条件が複合する中で、個々人においては瞬時に表記が選択されているのである。ただし、それがその場面にとって最適な表現であるかどうかは、また別の問題であることも明確となった。

従来、漢語の表記の多様性は、歴史や政策、パソコンなど電子機器の反映とする見方が中心的であったが、当研究は、それに先立つ個々人の筆記行動に関する事象や、その背景として存在している個々の筆記意識というものにも焦点を当てたものである。

さらに、それらの日本語表記としての今後のあり方について考察した。

これらの調査研究に関して各種の成果報告を公表した。さらに、漢語にとどまらず、和語の各品詞や外来語においても、同様の方法論を適用し、補訂を加えていくことによって、日本語表記全体をカバーする表記システムについて解明することが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①
笹原宏之「辞書を編む」
『ユリイカ』3　2012　p87-98
査読無

②
笹原宏之「「著効」の表現について」
『日本医事新報』4540　p63　2011
査読無

③
笹原宏之「漢字文化圏的一大奇葩　――日語中的当字和当読漢字文化」
『漢字文化』100　p40-45　2011
査読有

④
笹原宏之「答申された改定常用漢字表について」
『ことばの学び』23　p4-7　2010
査読無

⑤
笹原宏之「改定常用漢字表と日本語表記」
『日本語学』29-1　p54-80　2010
査読無

⑥
笹原宏之「「発症」について」
『日本医事新報』4499　p86-87　2010
査読無

⑦
笹原宏之「私が勧めるこの一冊　『日本語の現場』読売新聞社会部編」
『日本語学』28-13　p54-63　2009
査読無

〔学会発表〕（計４件）

①
笹原宏之「日本の国字の形成方法の主要パターン及びその歴史について」
東アジアの辞典学（Ⅲ）　東アジア固有漢字の国際標準化と辞典編纂
2012.2.10 檀国大学校　東洋学研究所　龍仁市　竹田キャンパス
招待講演

②
笹原宏之「異体字・国字の出自と資料」
「字体規範と異体の歴史」国際シンポジウム
2011.12.18　東京外国語大学

③
笹原宏之「日本における漢字への関心　ーその高まりと背景ー」
第１回 AEARU 漢字文化シンポジウムー第17回京都大学国際シンポジウムー「東アジアの漢字文化振興と漢字教育」
2011.12.16 京都大学
招待講演

④
笹原宏之「日本製漢字の動態　―『国字の位相と展開』補訂稿―」
　漢語対外伝播●（既旦）中日韓漢字比較学術検討会
　2009.8.31　中国浙江財経学院

〔図書〕（計 7 件）

①
笹原宏之「漢字文化圏の抱える共通点と相違点　－中国語と韓国語とベトナム語、そして日本語」
　池田雅之ほか編『世界のことばと文化シリーズ　国際化の中のことばと文化』p120-131 成文堂　2011

②
笹原宏之「漢字の今と未来　－中国、韓国、ベトナム、日本から」
　町田和彦編『世界の文字を楽しむ小事典』
　p158-166　大修館書店　2011

③
笹原宏之「文字・表記論と語彙」
　斎藤倫明・石井正彦編『これからの語彙論』
　p81-95　ひつじ書房　2011

④
笹原宏之『漢字の現在　リアルな文字生活と日本語』
　p1-222　三省堂　2011

⑤
笹原宏之「漢字一覧」
　金田一京助ほか編『新選国語辞典』第 9 版
　p1482-1557　小学館　2011

⑥
笹原宏之編『当て字・当て読み漢字表現辞典』
　p1-912　三省堂　2010

⑦
笹原宏之「漢字の数」「漢字の音訓」
　計量国語学会編『計量国語学事典』
　p153-156,159-161　朝倉書店　2009

６．研究組織
(1)研究代表者
　笹原宏之（ササハラ　ヒロユキ）
　早稲田大学　社会科学総合学術院　教授
　研究者番号：80269505